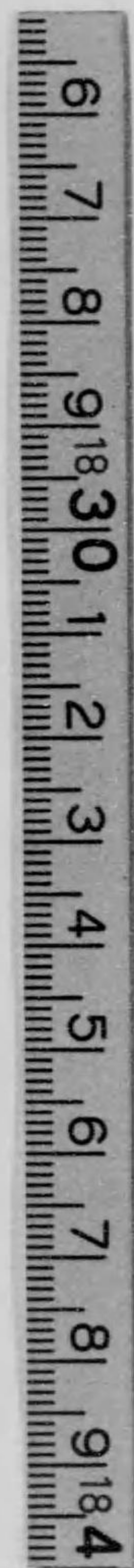


14.6=

114

大和風水害報文



始



14.6  
114

大和風水害報文

奈良縣測候所

目次

口 繪

- 一 春日神社境内風害圖、奈良公園倒木圖
- 一 磯城郡多神社鳥居倒圖、全境内折木圖

一 緒 言

一 地勢と河川

- 一 延寶二年六月大水……………一
- 一 元文五年八月洪水……………二
- 一 寶保二年七月大風……………二
- 一 寶曆六年九月大風雨……………二
- 一 明和二年七八月大風……………二
- 一 寛政元年八月大風……………二
- 一 文化八年五月初大風……………三
- 一 文化八年六月初瀬流……………三
- 一 文化十二年六月洪水……………四
- 一 嘉永三年七月大風八月大水……………五

大正  
4. 4. 5  
内交

- 一 安政六年八月水害……………五
- 一 慶應二年八月暴風雨……………六
- 一 明治元年五月洪水……………七
- 一 明治十八年七月風水害……………九
- 一 明治二十年十月水害……………一一
- 一 明治二十一年八月暴風雨……………一二
- 一 明治二十二年八月十津川水災……………一四
- 一 明治二十九年八月三十日暴風雨及九月上旬水害……………一九
- 一 明治三十二年十月六日水害……………二一
- 一 明治三十六年七月九日水害……………二四
- 一 明治四十四年六月十六日出水……………二七
- 一 大正元年九月二十三日颶風……………二九
- 一 大正二年十月三日颶風……………四三
- 一 大和の風水害と暴風雨の中心……………五一
- 一 結論……………五二



(日三廿月九年元正大) 圖害風内境社神日春



(上 全) 圖木倒園公其奈



(日三廿月九年元正大) 圖木折内境社神多郡城磯



(上 全) 圖倒居島社神全

## 緒言

古來大和に關する風水害の記録甚だ乏しく飛鳥時代より奈良朝時代の歴史に簡單なる記事なきに非ざるも文餘り簡にして其詳細を知り難く且平安朝以後に至りては或は京都或は鎌倉或は江戸を主として記録せられたるものごと大和地方の一局部に限られたる記事の如きは甚だ少く殆んど之が調査の途なかりしが偶然農事試験場長中村鍊太郎氏の話に山邊郡朝和村大字長柄及び同郡二階堂村大字荒蒔に舊記録あることを聞き延寶二年以後明治二十九年に至る二百二十二年間の風水害記録を得之に明治三十

年當所創立以後大正三年迄十八年間の記事を併せ前後二百四十年間の調査に據りて報文を編せるものなれば以て大和地方に於ける風水害の大勢を知るに足らん乎

余は茲に農事試験場長中村技師朝和郵便局長飯田熊治郎氏及び二階堂村荒蒔區長諸氏の材料を供給せられたる好意と當所武田技手の助力を感謝す

大正三年十一月

奈良縣八木測候所長 森田己貴太

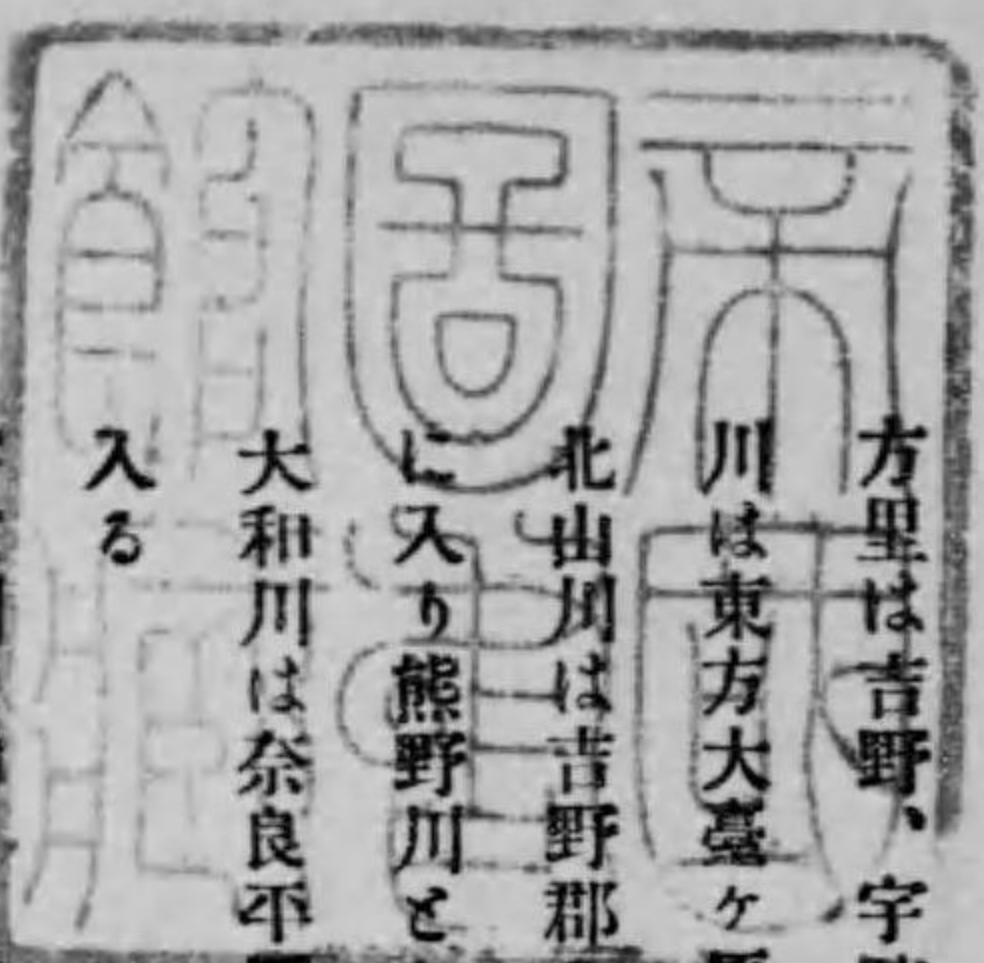
## 地勢と河川

奈良縣は南に和歌山縣。西に大阪府。北に京都府。東に三重縣の二府二縣の間に在る陸地にして全面積二百五十六方里餘を有し其北部に當り二十方里餘の平坦部即ち奈良平原ありて一市八郡に亘り其餘の二百三十六方里は吉野、宇陀兩郡を主とせる山嶽部なり故に縣下の流水は悉く山間の溪流若くは河川の上流にして吉野川は東方大臺ヶ原山(千六百九十五米)の北面に發し吉野郡の北部を西に横斷し和歌山縣下に入り紀の川となる。北山川は吉野郡の東部を。十津川は同郡の西部を流れ共に大峯山系(最高山頂佛經巒、千九百十五米)を挟みて南下し和歌山縣下に入り熊野川となる。

大和川は奈良平原に屬する全部の流水、王寺に集りて大和川上流を形成し西流して龜の瀬を過ぎ大阪府下に入る。

宇陀川を初とし其他の宇陀郡にある流水は何れも北東に走りて名張川に入る。

以上の如くして何れも大和川。紀の川。熊野川の上流なれば其出水するに當りては急速に河川に集り奔流するを常とす而して吉野川。十津川。北山川等は山間部に在れば大和川に比すれば常に洪水の害は少きも材木流失等の爲めに損失また少しとせず又大和川は平坦部に在るを以て田畑堤防家屋等の損害多くして直接村落に及ぼすことは到底他川の比に非ざるなり今延寶二年より明治二十九年に至る大和の風水害及び明治三十年縣立八木測候所創始以來の風水害に就て調査せるところのものを擧ぐれば左記の如し





延寶二年六月十四日大水

紀元二三四四年  
西曆一六七四年

六月十四日大和川大水堤防切所多數あり生駒郡小泉の庚申堂流れ同所大方流る

元文五年八月中旬畿内洪水

紀元二四〇〇年  
西曆一七四〇年

八月中旬五畿内洪水の時に金剛山、葛城山の流なる葛城川の堤防御所町にて切れ同町千二百軒の所七百軒許流れ溺死者三百人程あり全町内河底と變じ田地は砂に埋められ御所町より川下は同町程にはあらざりしも實に稀有の水害なり

寛保二年七月二十二日大風

紀元二四〇二年  
西曆一七四二年

七月二十二日の雨後大風となり田綿の損害多く大和の所々にて家屋土藏の潰倒せるあり

寶曆六年九月七日大風雨

紀元二四一六年  
西曆一七五六年

九月七日大風雨にて大和川出水し初瀬川筋の破堤ありて山邊郡上ノ庄、二階堂邊は浸水せり同日本津川切れ木津町千軒程の所七百軒餘も流れ溺死人多し此時宇治橋、淀大橋及び堺の大和橋も流失せり

明和二年七月六日畿内大風

紀元二四二五年  
西曆一七六五年

七月六日畿内大風ありて奈良の市舎二百戸潰倒せり

同年八月二日大風あり大和の諸村落に家屋の潰倒多し

寛政元年八月二十日奈良大風

紀元二四四九年  
西曆一七八九年

八月二十日此日晝頃より大風恐しく吹出で人家は倒れ大木は半より折れしが夜に入り尙ほ止まざりしが夜更けて静まりぬ此時大和は一際風強く春日神木なる大杉も倒れし程にて其他大小の杉吹倒されし數知れずして三十八ヶ所の社も倒れ又燈籠の倒れし數は千三百餘本に及べり

文化八辛未年五月大水

紀元二四七二年  
西曆一八一二年

五月朔日より六日まで雨降續き大和に大出水し三輪にて家三軒流れ西代村問屋の際にて寺川破堤し家土藏三棟流れ種粕、鹽其他油、素麵多數流失す

文化八辛未年大和洪水初瀬流

紀元二四七二年  
西曆一八一二年

六月十五日夜五ツ時(午後八時)より小雨降出し同夜八ツ時(十六日午前二時)頃より一時許大雨頻に降りし爲めに初瀬より奈良迄の山手は殊の外大水となり初瀬にて家三十軒許流れ溺死せし者六七十人あり其外に泊込の旅客十五六人溺死せり而して追分、金屋、三輪の邊は床上へ浸水し布留谷にても人家五六軒流れ丹波市村は全部床上へ浸水せり又岩屋谷村にても家二軒流れ櫛ノ本村にては土橋悉く流る又菩提山川の出水にて高樋村に潰家二軒と中之庄村に流家二軒あり藏ノ庄川破堤し人家三軒流れ白土村、發志院村、中條村、番條村等一跡に水押しなる又岩井川は北側三ヶ所切れ大安寺村水押しなり往來二日止る

奈良山よりも多く出水し猿澤池の鯉多數流出せり

奈良町も水押の爲めに番所及牢屋へ浸水し囚人等は山へ避難せしむ奈良三條の西方にて水の深さ八尺許あり

郡山大橋落合にて北方へ切れ京街道は五六尺の深さあり今回の出水は一夜の雨とて宮堂、吐田、窪田の如き  
水害場所には損害なく反て山の峯にて流家あり死人ありしは實に珍事なり

文化十二亥年六月大洪水

紀元二四七五年  
西曆一八一五年

六月二十五日夕方より雨降る是迄照續きにて翌二十六日水取せし程なりしが同日も降雨し夜中より大雨とな  
り二十七日四ツ時(午前十時)まで覆盆の勢を以て降り頻りし爲めに初瀬川、寺川、檜川、岩井川、菩提山川  
の諸川何れも漲溢し所々に破堤を告ぐるに至れり今其概況を示せば

山邊郡番條村の南堤切れ同村内悉く浸水し又庵治、田原本、八尾等にて數ヶ所切れ各村に浸水せり

添上郡丹後ノ庄も請堤切れ人家過半を浸し筒井は辛くも難を免れしも其下流なる

平群郡に入りて破堤多く八條、宮堂、額田部、窪田、笠目、川合、小吉田、車瀬の諸村落は悉く浸水し大河  
の如く數日間往來止となる

添上郡は奈良川の出水にて所々破堤し橋は悉く落ちたり

山邊郡二階堂村荒蕪總代の記録に宮堂村は大水にて深さ九尺許あり二階堂村の南堤にて二尺あり二階堂より  
宮堂へ筏渡にて行通し金剛山まで一ヶ村も残らず水押となるとあり

吉野郡にては吉野川の出水にて下市村は人家五十軒流され多數の溺死人あり

音羽山の崩壊あり三輪山にて百餘ヶ所崩れ十市城山下も崩壊せり其他吉野奥、宇陀奥等も數多の崩壊ありて

雲雀山の如き堂伽藍残らず土中へ埋没せり

今回の洪水は未曾有の事とて人々恐怖せざるはなし六十年前なる寶曆六年九月十七日の大水も珍らしき水な  
りしが其時よりも三尺許多しと云ふ

嘉永二庚戌年七月大風八月大水

紀元二五〇〇年  
西曆一八五〇年

七月二十一日夕方より二十二日朝に亘り大風雨ありて大和國內諸所に於て家屋、稻小家、物置或は垣塀の倒  
れしもの或は傾きしもの其數を知らず

八月八日大雨あり諸川は水溢れ破堤あり溜池は満水せり山邊郡朝和村字ウノコ、赤合近傍にては水の高さ八  
尺許あり古來斯る浸水に及ぶ時は其水を引さんが爲めに三條樋と横廣村土橋との間に幅三尺深二尺切抜て  
上は水を吐かすこと先例なるに付此度も切抜たりしに後に此普請をするに銀三百匁消費したりと實に近年稀  
なる大水なり而して朝和村丈の水害にても左の如し

堤防破壊 七ヶ所

堤の居去 三十七ヶ所

田地水押 四十二町歩

安政六未年水害

紀元二五一九年  
西曆一八五九年

八月十二日晝七ツ時(午後四時)頃より降雨ありしが同夜殊の外大雨となり翌十三日大水出て山邊郡備前村氏  
神社の東側にて東堤十六七間許り破れ長柄村耕地の浸水反別四十餘町歩に及ぶ其他諸方に於て破堤あり浸水  
の害を受けしもの多し

慶應二丙寅年暴風雨

紀元二五二六年  
西曆一八六六年

八月五日小雨降出し六日降續し七日に至り朝來東風吹き小雨は依然として降續きしが酉の上刻(午後六時頃)より風雨少しく強まり戌の中刻(午後九時頃)より辰巳風(南東風)に變し風雨彌々猛烈となり戸を吹放し瓦を飛ばし樹木を折又は倒すに至りしが子の刻(夜半)に至りては川々満水し堤防は危険となれり而して多數の家屋納屋の潰倒せるものありて多くの死傷者を出し三十餘年間に無き大風雨なり而して三輪より櫛ノ本附近までの神社内に在る樹木の吹倒されしものを擧ぐれば左の如し以て風勢の如何に強大なりしかを推察するに足らん

三輪山	倒樹大小	一万二千餘本
大和神社境内	全	五十餘本
江境神社境内	全	五十餘本
海知村氏神境内	全	三十本
八田村氏神境内	全	大樹 三本
櫛ノ本氏神境内并ニ馬場共	全	大小 三十餘本

右の外諸山林及神社の樹木の害被少なからず

此暴風雨は八日朝に至り鎮靜せり而して風向ひ初め北東より漸次に南に廻り西に至りて風力稍々衰弱せり此

暴風雨の爲めに大和國丈にても數百軒の倒家ありしことは疑ふべからずと附記しあれば此暴風雨の中心は四國若くは紀淡海峡より中國若くは大阪灣を襲ひたることは明なり

明治元年五月十三日大洪水

五月十二日晝七ツ頃より同夜に亘り大雨あり十三日も大雨降續せる爲に各河川共に出水し破堤の箇所多きを告げしも水勢の猛烈なるが爲めに之が防禦の道なく遂に戊辰の大洪水として慘狀を呈するに至れり今二三川筋の出水及び山崩等を擧げて其概況を報せん

- 一 初瀬川筋は頗る出水多かりし爲めに破堤箇所多くして式上郡松ノ本村にては床上浸水二尺許にて家二軒半潰し三輪村は全村家屋悉く浸水せり
- 一 立取川筋は櫛ノ本村の破堤あり家一軒流れ奈良街道の家屋は浸水せるもの多く田地へ土砂を流込むこと深き五寸乃至三尺に及べり
- 一 飛鳥川筋は小房村南口大橋の西方にて北側へ破堤二十間許ありて同村西町は悉く床上へ浸水せり又今井村南口蘇武にて破堤し同村西町にては床上へ浸水せり
- 其他曾我川、葛城川、檜川、佐保川、富雄川等の各川筋も出水夥しく多數の破堤あり田畑の被害頗る大なり
- 一 忍海郡に山抜けありて寺口村にては二十二棟流屋あり内住家七軒其他は稻小屋物置なり即ち當村内に

山崩四十九ヶ所ありて就中上方の崩口より水を吹出し遂に樹木岩石等を押流すに至れり是れ俗に洞と云ふものにて其鳴響荒涼しく再び大水吹出さんことを恐れて一時は人心恟々たりしと云ふ

- 一 西山向は青谷より金剛山までの間に山崩大小百八十餘ヶ所ありて五六里の距離にて遠望し得たり
- 一 東山向は三輪山より竹ノ内峠まで山崩大小六十餘ヶ所あり
- 一 式上郡纏向村穴師にて家屋、稻小家、物置十六棟潰倒し同十六日又山崩して大水出て潰家あり四人其下に壓せられしも二人は助かりたり

#### 大和川筋水押

大和平原は全部大和川流域に属すれば其大部分の田野に浸水し殆ど一大湖面の如き觀あらしむるに至り其浸水の深き所にては式下郡結崎郷の低所に於て水深さ七尺乃至一丈、山邊郡宮堂村の同七八尺、平群郡窪田村の同七尺等にて其下流なる廣瀬郡廣瀬村は最も慘狀を呈せり

右水害にて田畑の被害は甚た多大なるも概して押水なるを以て建物の流失及潰倒は比較的尠なかりし

其後七月十八日再度の大水ありて慘狀を極めしが此時にも飛鳥川破堤せり今回は小房橋の南方にて切れし爲めに小房觀音の門流れ小房本町と新町にて流家十九軒あり八木も全部浸水せり夜中の事にて溺死者三四人あり當年の水害は實に擴大にして單に田畑の土砂入り及び破堤を擧ぐるも左の如し

大和國 田畑土砂入り反別 三百八十七町九反

#### 破堤 百五十九ヶ所此間數四千三百十八間

#### 明治十八年七月一日ノ風水害

紀元二五四五年  
西曆一八八五年

同年は五月末日より六月に亘り霖雨にて六月十七日の出水にて山邊郡長柄村備前村附近の水害あり其後二十六、七日の降雨あり二十九日に至り更に午後五時より大雨となり遂に諸國の大洪水を報ずるに至りしが大和に於ても同日午後五時より同八時までに諸川悉く満水し雨は三十日午前八時頃まで須臾も止まず降續し茲に各河川の氾濫を見るに至れり而して七月一日午前十時過より北東風吹出し同十一時頃に至り愈々強く雨も亦益々降頻り午後四時頃に至り風勢更に強大となり屋根瓦を吹飛し或は立木を倒し家屋を破壊するに至り爲に一層水害をして慘狀を極めしむるに至れり此風水害は吉野郡にては比較的被害尠なかりしも大和平原全部に及び明治元年以來の大災害なり而して今大和川流域内二三川筋の状況及び山嶽の崩壊等を擧げて其風水害の程度を示さんに

- 曾我川筋は北葛城郡廣瀬村にて九十五間破堤し田地に土砂を流込むこと拾町餘に及び同村内へ浸水し甚しき場所は床上にて襖の引手を浸すに至る又同郡百濟村にては七十間餘西方へ破堤し浸水家屋多く土砂の流入せる田地百町餘に及び

- 佐保川筋は添上郡番條村にては田面にて浸水深さ八尺より一丈餘に及び家屋は悉く浸水し床上四尺に及びたるものあり

○ 郡山舊城南方の外堤破れ一丁目の国立銀行邊は庭内に浸水し五丁目の辻にては人の膝頭に及べり  
 ○ 宇田川筋は洪水の爲め名張迄の間は悉皆落橋せり  
 又山崩も數十ヶ所ありて東山にては福住峠より三輪山までの間に西面に崩れしもの十二三ヶ所あり  
 西山にては國分越峠より金剛山までの間に東面に崩れしもの二十餘ヶ所あり  
 又大阪府の報告として同年八月十五日の官報に載せられたるもの左の如し

浸水地反別

一田 三八五五四<sup>反</sup>、七 一畑 三七〇六<sup>反</sup>、七 一宅地 五六七<sup>反</sup>、二

流橋及破潰橋梁

一流橋 一七 此延長九十三間一分  
 一破潰 二九 此延長百五十七間一分

家屋流失倉庫納屋流失破潰

一家屋流失 四 戸 一家屋破潰 二一四 戸 一倉庫納家破潰 一六二 棟  
 一溺死人 一六人 一生死不明 二 人

今回は初瀬川筋は比較的出水少なかりしも其他の川筋の出水多くして遂に明治元年の洪水に次ける大水災となれり

明治二十年十月七日ノ水害

紀元二五四七年 西曆一八八七年

十月七日淺薄なる低氣壓(示度七百四十三耗)は支那東海ヨリ來り七日、八日我南海岸及び東海岸に沿進し北海道の東方に去れり即ち低氣壓の中心は紀州熊野を掠めて通過したるものにて大和地方に水害を來せり今其當時に於ける被害概況を記すれば

五條警察署宇智郡中村字松ヶ坂金池の堤防二十間許破堤し田地八町許を埋め同郡今井村にて伊勢街道約十二間破壊せり又高市郡曾我川漸次増水し破堤あり曲川村、東坊城村、滿田村等は大抵人家を浸し其下流に於ける廣瀨郡は最も甚しく同郡萱野警察署(箸尾にあり今は高田の分署)の如きは床上を浸す又葛下郡王寺村葛下川の堤防數十ヶ所破堤し百餘町の田面に浸水し湖水の如し添上添下兩郡は比較的被害少なかりしも其他は相應の被害あり當時の被害反別左の如し

郡別	田	地	綿	畑	雜	畑
添上	七十七町二反		二町八反二			一
添下	百二十町		三十三町二反八			三町二反三
山邊	百二十一町六反五		五十一町五反五			六反
廣瀨	四百〇一町		百〇五町二反八			六十九町八反四

計	吉野	宇智	忍海	葛下	葛上	高市	十市	宇陀	式下	式上	平群
二千二百八十八町九反八	五町三反九	二十六町三反	一町一反	百四十五町七反三	一町五反一	四十七町一反五	四百八十九町	1	五百二十五町四反	三十七町五反五	二百九十町
六百八十三町六反七	1	十二町五反	1	六十一町三反三	一町二反	十六町四反	百三十三町二反八	1	百六十二町七反九	四町七反四	九十八町五反
二百四十六町二反四	1	二町九反	1	一町九反五	一町八反	十二町二反一	四十三町六反三	1	三十一町三反八	十四町四反七	六十四町二反三

明治二十一年八月三十日暴風 紀元二五四八年 西曆一八八八年  
 八月二十九日暴風の中心(示度七百三十九耗)は沖繩の近傍より三十日遠く豊後海峽の沖を経て紀伊海峽より

大阪及び京都を踰へ三十一日岐阜伏木の間を進行し宮古の北邊を過ぎ太平洋に出で、北海に去る  
 此暴風雨は近畿地方を初め本州の大部分を荒せるものにて我大和にては三十日午後十時頃より南東の風吹出し同十一時頃より風雨となり漸次其勢を増し殆ど安眠せし者なかりしが三十一日午前四時頃に至り風雨共に静穩に歸したり而して此暴風の猛烈なりし當時に家を倒し瓦を飛し墻壁を破壊し樹木を折り或は倒したるが全縣下に亘り死傷者を出すに至れり又吉野川の出水にて破堤あり流橋あり當時縣下の被害統計は左の如し

潰

家	二九一戸	家	七〇二戸
納家	二〇五棟	納家	五一四棟
寺	一	寺	八
雪隠	四七	倉庫	一
屠牛場	一		
火葬場	三		
道路大破	一三七ヶ所	壓死者	一六人
墻壁大破	一六九三ヶ所	負傷者	一〇人
樹木倒	四九一本		

半潰又ハ大破

明治二十二年八月吉野郡十津川水災

紀元二五四九年  
西曆一八八九年

同年八月十八、十九兩日の暴風雨は吉野郡十津川に大慘狀を來せるものにて當時は縣下に未だ氣象觀測の實  
施せられざる以前なるが故に其詳細を知るに由なしと雖も其當時の天氣圖及び和歌山測候所及び津測候所の  
實測に就て見るに暴風の中心は十八日に太平洋の南方遙沖より襲來し十九日四國の東部及中國を通過し日本  
海に出て二十日海岸に沿ふて進行せり之か爲めに紀州汐岬にては東の烈風吹き十九日午前には南の颯風とな  
り夫より午後は南々東の烈風に二十日午前は南南東の強風に風力漸次衰退せり又和歌山の雨量は十八日に三  
十二耗四、翌十九日に七十八耗一にて合計百十耗五あり、津の雨量は十八日に〇耗八、十九日に五十五耗七、  
二十日に四十九耗七にて合計百〇六耗にあり

以上の如くにて十津川地方も固より相當の暴風雨なりしことは吉野郡水災誌の記事にて明なるも其大慘狀を  
呈するに至りし所以は風雨の爲めに山嶽の崩壞を來し其崩壞せる岩石土砂は一時に川筋を閉塞し爰に山嶽よ  
り奔下し來る急流を喰止めたるを以て忽ち河水は氾濫して河岸の家屋田畑を洗ひ遂に多數家屋の破壞或は流  
失及び死亡者までも出すに至りしものとす

今参照として吉野郡水災誌より其記事の一部分、理學士巨智部忠承氏の意見及び被害高等を採萃すれば左の如し  
○ 八月十七日朝天微曇薄暮に至て沛然雨下る先是炎暎連旬衆民雨を祈り日夕天を仰き雲霓を渴望して已  
まさりしか此に至て田野膏潤禾稻悖然蘇息せしを以て邑里相賀し歡聲路に載つ越て十八日疾風北東よ

り來り暴風乱注田野作物多くは損害を被り民家爲めに破壞する者亦尠からず夜に及んで風力益々強し  
十九日黎明に至ては風稍々衰弱するも雨勢愈々猖狂なり午后天色墨の如く強雨覆盆より甚し加るに電  
光空を燭し迅雷段々夜正に闌なるに及んては天地慘怛山河震動す衆民大に恐れ或は高燥の地に轉居し  
或は神に祈り佛を念し十方生命を保護し殆んど狂癡せる者の如し廿日に至ては風伯既に死し雨亦迹を  
歛めたり(照續きたる後の暴風雨なり)

山崩水漲河流壅塞、山野廣遠河流無數崩壞するもの壅塞するもの悉く枚擧す可らず

吉野郡山崩被害地視察報告書

農商務四等技師理學士 巨智部 忠 承

今回吉野郡西南部に於ける山腹崩壞の原因を探究するに地質學理を應用するに非されは之か説明をし  
て該當周密ならしむること能はず故に地方人民は此變災以後恰も雲烟の中に坐するか如く憂苦寢食を  
安んせざるに至りしなり

抑も吉野郡の地質は古生紀の地層にして硬輒の層々相重なり其層向は東西に走り北、北北東、北北西  
を指すと各所同からずと雖も皆北に向はざるもの稀なり故に川の本流は地層を横斷するを以て彎曲し  
支流は其層向と駢行するを以て概ね一直線を畫せり即ち岩石の種類には砂岩、粘板岩、炭硅岩、凝灰  
岩あり砂岩とは俗に所謂粗礫の如きもの粘板岩とは剪刀砥若くは硯石の好きもの炭硅岩とは漆黒にし

て或は灰の如く或は石炭の如きもの凝灰岩とは猿谷村及び宇宮原村の一部に産出する赭色、褐色若くは緑色の岩に白色の石灰石脈を介さむものを云ふなり此他猶二種の岩石あり一は洞川村柏木村及び此山谷の南部に於て焼製する石灰の原料に供するものにして石灰岩と稱す他の一は大峯山嶺の怪巖奇峯となる黝色又は赭色の石にして板を疊するか如き觀を呈し燧石に類するものにして角岩と名つく蓋し其色の牛角色を帯びたるを以てなり此二種の岩層の吉野郡の中央を南走する山上山脈以東の地に多く沿達せりと云ふ

右の岩層中最も軟弱にして容易に大氣霜冰に浸蝕腐爛せられ隨て雨水の浸滲を導くものは粘板岩と炭硅岩とにして實に今回罹災の地方此二種岩石多きに居る蓋し年々歳々腐蝕しつゝある岩石の上面には是に由て生ずる所の屑片粉末は其處に新地層を堆積せざるを得ず即ち土砂積礫の因て生ずる所以なり却説十津川の豁谷幽深なるに由り地勢自から峻峻を極め其位置南海より來る所の温風の衝に當るを以て多く雨露を沈澱し樹木鬱鬱として濕氣常に充ち只管岩石の腐敗を促がすに適せり而して土砂の堆積は漸く嵩みて二十五尺乃至三十尺の厚さに達し川身は愈々地中に沈んで斷岸益々險しく曾て幾千年來堅牢なる岩石の維持したる山側勾配は今脆弱鬆疏なる砂土の保持する所と爲れり況んや本年は春來雨多く六七兩月の連雨は本邦他地方に於けるが如く十津川に於ても三十餘日に亘り加るに去月十八、十九兩日は未曾有の雨量にして山側の小溪も忽ち大瀑布を現出し平素一泓の水を見ざる矮凹の地も俄

然として噴濺と成れり此時に當りて土質の鬆疎にして其基礎の弱きもの又は急斜の位置に在るものは一は蓄水に由て自己の重量を増加するに因り一は地中水脈の流動猛烈にして地盤と土砂層との間を決壊するに據り勢ひ崩落せざるを得ざるに到りしなり即ち俗にヌリ、山潮、山拔ケ等と稱するものにして深山幽谷に往々是あり豈特り十津川に限らんや然りと雖も今回の崩壊は數千の箇所全時に起り且其多數は地方人民の宅地耕地にあらざれば祖先傳襲財産の一部たる山林なり故に之を怖れ之を惜むの情に至りては實に深からざるを得ず況んや親族朋友を喪ふの悲歎の極に陥るに於てをや(以下畧)

被害一表

村名	流	家潰	家	死亡人	死牛
天川村	一七	一二	一〇	一	一
大塔村	四三	四四	三五	四	一
野迫川村	一六	二三	二七	一	一
十津川村	二六七	三四三	一六八	四七	一
宗檜村	一三	二一	五	一	一
賀名生村	八	一七	一	一	一



南吉野村	一	四六〇	四	一
計	三六五	四六〇	二四五	五二

被害二表

村名	田	畑	宅地	山林	原野
天川村	四四、八	三六、〇	二、八	三八、二	一
大塔村	六四、五	七〇、四	九、九	三三、三	二、八
野迫川村	九三、四	三〇、〇	一、一	四一五、〇	一
十津川村	一一〇八、二	一〇六〇、一	四八〇、七	八五七三、七	六三二、七
宗檜村	四四、七	二一、八	一、六	一九一、六	〇、三
賀名生村	八、二	一	〇、三	二六五、〇	一
計	三八三、八	一一九一、三	四九六、四	九四八六、八	六三五、八
當時價格	七八一三・三七 <sup>円</sup>	三九八五・九八 <sup>円</sup>	七一九・九四 <sup>円</sup>	二九六・七〇 <sup>円</sup>	八・九三 <sup>円</sup>

明治二十九年八月三十日の暴風雨及九月上旬の水害

紀元二五五六年 西曆一八九六年

八月三十日優勢なる低氣壓七百十五耗は大平洋の南方沖より熊野浦沓岬に襲來し更に北上して我大和を縦貫し山城、近江を掠めて若狭沖に出て三十一日午前六時には日本海北部に去れり之が爲めに和歌山にては三十一日午後十一時に西風二十八毎秒の烈風吹き大阪も同時に北西風三十三米七の颯風吹けり而して両地共に豪雨を添へ和歌山は夜半に百四十一耗(前十時間降量)を測り大阪も同時に百七十三耗を測れり

我大和にては當時未だ氣象觀測の創始せられざりしも兎に角颯風の中心は大和を通過せることよて非常の風雨となり家屋を破壊し田畑を荒し多數の死傷者を出せり参照として當時の記録及び各被害を擧ぐれば

大和にては八月三十日朝より降雨し午前十一時頃に暫く止みしが午後〇時十分より再び降出し午後四時過より風雨となり夜八時前より北東風益々烈しく樹木を折り瓦を飛ばし家屋を倒し其勢猛かりしが翌三十一日午前二時には風雨共に衰へ同三時には全く静止せり此暴風雨の爲めに受けたる被害は吉野川筋最も多くして多數の流家、倒家ありて死傷者もあり今五條町に於ける状況を記せば

吉野川の出水にて大島の堤防百六十間餘決壊せる爲めに河水は直に五條町に流れ込み同町に於て潰家二十戸半潰家十四戸を見しのみならず溺死者三人を出せり

既に以上の如き風水害ありたる上に又々九月七日より十日に至る連日の霖雨ありて大和の災害一層甚しき惨状を呈せり而して前後二回の風水害にて大和の受けたる被害を擧ぐれば實に貳百拾六万九千七百拾七圓と計

上せられ死亡者七十一人負傷者五十三人を出すに至れり其内譯は左表の如し

種別	員數	損失價格
死亡人數	七一	1
負傷人數	五三	1
家畜死亡數	一七四	一六九 <sup>円</sup>
建築物 流 失 軒數	九二二	七三、一一三
破壊及浸水 全	七、〇六〇	一〇八、六一五
耕地 流 亡 反別	二二〇 <sup>町</sup>	九八、二七二
年季荒 全	一八五	一二四、〇五五
生毛ノ損毛 全	四、五八一	三五一、七四八
宅 地 全	四五	二二、五一六
雜種地 森林山野 全	三、一二七	七九一、〇七八
其他 全	一九四	三六、三〇四
堤防 切 所 延長	六、二五二 <sup>町</sup>	六五、四一七
缺 所 全	一一、二二二	三六、九七七

川除 破 損 ケ所	二、九六三	七二、〇三〇
用悪水路破損 全	一、〇九三	九、〇五九
道路 缺 損 延長	一六五、一二三 <sup>町</sup>	一六五、三一五
橋 梁 流 失 ケ所	一、二四七	六四、〇九三
同 毀 損 全	六一二	一六、四二九
雜 種 流 損	六〇〇、二五二	一三三、九六二
船舶流 失沈没 五十石以下	二一	五六五
五十石以上	1	1
損害代價合計		二、一六九、七一七

因に記す明治二十九年九月十日の大水は大阪に於ては明治元年五月十三日の洪水及び同十八年七月一日の洪水と共に明治年間の三大洪水として記憶せられ就中二十九年は最も大水なりしと云ふも大和にては比較的大水とならざりしは不幸中の幸と云ふべし

明治三十一年十月六日ノ水害 紀元二五五九年 西曆一八九九年

十月六日沖繩の東方にありし低氣壓七百四十七毫は漸次北東に進行して七日午前六時に至り紀伊水道の沖に來り熊野浦を掠めて東海道を襲へり爲に大和地方にては五日未明より七日に亘り降雨あり七日午前於て雨

勢頗る烈しく午後強風となる而して雨量は生駒郡北倭村高山の百三十一耗二(一坪面に二石四斗)乃至吉野郡大臺ヶ原山の五百三十三耗八(一坪面に九石七斗七斤)の降量ありて吉野郡に於ける熊野川上流及び吉野川流域は概して多量の降雨ありしが全縣下に蒙りたる水害高は參拾參万參千參百八拾八圓を計上するに至れり今縣下の降水量及び郡別被害高を擧ぐれば左表の如し

降水量

熊野川上流	玉置山 三四三、〇	大臺ヶ原 五三三、八	御所 二〇三、五	松山 二二七、九
	小森 三二六、八	和田 二二六、〇	高田 一八二、六	菅野 三二六、四
	南日裏 二六六、一	迫 二五九、三	八木 一八四、八	三本松 二二七、六
	洞川 三六二、五	五條 二二一、三	三輪 一七七、八	南ノ庄 一九四、〇
	寺垣内 三七八、二	上市 二一六、二	王寺 一六〇、五	月ヶ瀬 一五一、三
	河合 二七九、二	鷺家口 二四九、一	丹波市 一四四、〇	
	1	1	奈良 一四六、二	1
	1	1	郡山 一四七、八	1

出水被害高

平均	三二六、〇	1	平均	二八三、七	1	高山	一三一、二	平均	二二七、四	1
平均	三二六、〇	1	平均	二八三、七	1	平均	一六四、三	平均	二二七、四	1

種類別	被害高	郡別	被害高
河川	七壹、〇九九 <small>冊</small>	添上	參、八八九 <small>冊</small>
道路	貳六、九貳貳	生駒	四壹、五八七
橋梁	壹貳、參八壹	山邊	五、貳貳八
溝池及用懸水路	五、八六五	磯城	九七、八壹〇
建物	壹壹、壹貳貳	宇陀	參〇、七四七
畑	壹七四、四九六	高市	貳〇、參八八
宅地	壹貳、六八五	北葛	壹〇、壹六八七
森林山野地	八、壹貳〇	南葛	六、八壹八
其他	壹〇、六九七	宇智	參、〇參〇

計	1	1
參參參、參八七	1	1
奈	計	野
頁		
參參參、參八七		貳貳、貳壹參

明治二十六年七月九日水害

紀元二五六三年  
西曆一九〇三年

七月七日午後二時朝鮮海峽に七百五十耗の淺薄なる低氣壓の襲來せるありて本州西部に雨天を報するに至りしが低氣壓は中國を横斷して八日午前六時に丹後より日本海に入り北陸海岸に沿進し九日午後十時には北海に去りしが更に一個の新低氣壓七百五十耗の琉球方面より九日午前六時に四國を襲ふありて午後二時には本州北部に達せり之が爲めに大和地方にては七日より九日に亘り降雨あり王寺の百八十九耗五乃至大臺ヶ原山の四百六十八耗七の降量ありて就中八日午前より九日午前に亘り雨勢頗る烈しく八木に於ては八日午前十時より九日午前二時まで十六時間に百八十五耗七(一坪面に三石四斗)を測れり左れば全縣下に亘り水害あり其被害高百八拾万千六百〇圓に上りしが就中平坦部の生駒郡、磯城郡、北葛城郡の低地は其被害頗る多し今縣下の降水量及各郡別被害を擧ぐれば左の如し

降水量

熊野川上流	吉野川	大和川	名張川上流
玉置山 二〇二、〇	大臺ヶ原 四六八、七	御所 二六二、六	松山 二八一、二
小森 四〇三、九	和田 三六五、三	高田 二五二、九	菅野 二九〇、四
南日裏 二〇〇、九	追 三三五、九	八木 三〇四、一	三本松 三〇一、〇
洞川 三六九、六	五條 三三六、二	三輪 二二三、三	南ノ庄 二八九、九
寺垣内 一九四、三	上市 二六一、四	王寺 一八九、五	月ヶ瀬 二八九、一
河合 三八七、二	鷺家口 二八四、一	丹波市 不詳	
郡山 二一六、八	奈良 二四三、〇	高山 一三一、二	
平均 二九三、〇	平均 三四一、九	平均 二四〇、四	平均 二九〇、三

出水被害高

種類別	各被害高	郡別	被害高
-----	------	----	-----

河川	四六貳、八九〇	添上	壹〇〇、貳四九
道路	壹參〇、〇壹八	生駒	四〇九、貳六〇
橋梁	四八、四六九	山邊	八參、六七貳
溝池及用器水路	六八、四〇九	磯城	五四壹、五七六
建物	壹四貳、九貳五	字陀	貳六、六〇九
田	六六七、九〇八	高市	五九、貳四壹
畑地	壹貳四、〇九參	北葛城	參九八、壹貳貳
宅地	八、壹六〇	南葛城	參壹、九〇七
森林山野地	四六、〇六壹	字智	四九、七九五
其他	壹〇貳、六七五	吉野	九參、四八〇
計	壹、八〇壹、六〇八	奈良	七、七〇六

右出水にて九日朝飛鳥川は高市郡四條新町に於て破堤し押水は今井町に流れ込み又蘇武橋下にて破堤し畝傍中學校構内及び當所觀測芝地にまで浸水するに至れり

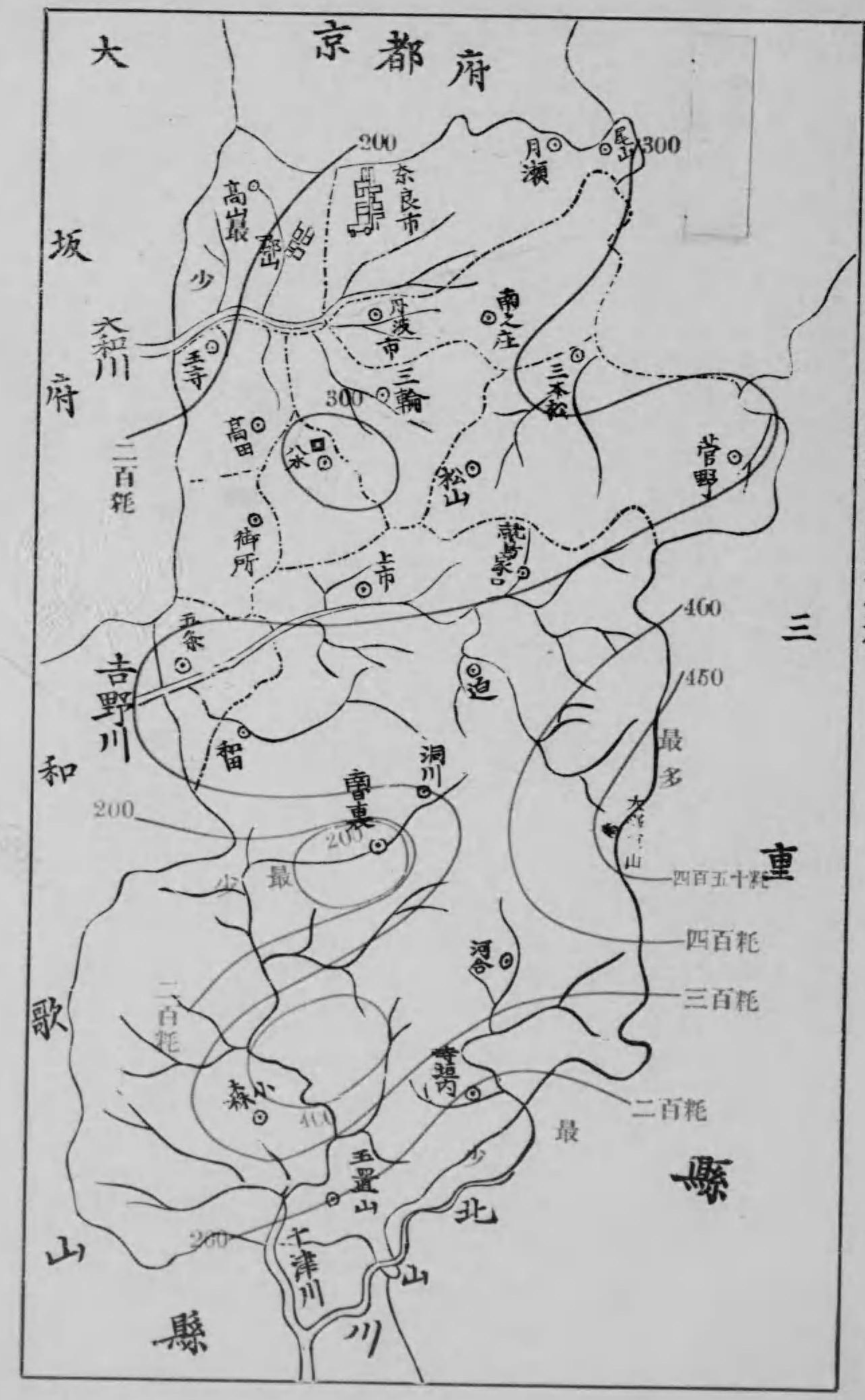
明治四十四年六月十六日出水 紀元二五七一年 西曆一九一一年

六月十五日より十六日に亘り二個の淺薄なる低氣壓の朝鮮海峽より連續して日本海を通過せるものありて爲に大和地方にても十四日午後六時過より降雨となり十六日午前中は御所、高田、八木附近の地に最も烈しく午前二時より同十時に至る八時間に八木にては八十八耗九を測れり之が爲めに飛鳥、蘇我、葛城諸川の出水あり

飛鳥川は一丈餘の増水あり午後二時眞菅村大字五井の堤防コンニヤク橋にて延長六尺崩潰す、八木町大字東八木にて約二三寸の浸水家屋十軒あり  
蘇我川は増水し水面と蘇我橋床の間約四寸に及び西岸の家屋五戸床上に浸水せり  
葛城川は約五尺増水せり  
又吉野川及び熊野川の上流には比較的降量少く名張川上流は相應の降量ありしも何れも格別の被害なかりし今各川筋の降水量を擧ぐれば左の如し

熊野川上流	吉野川	名張川上流	大和川
玉置山 一四四、八	大臺ヶ原 六七、三	松山 一一六、七	御所 一八一、二
小森 一二〇、七	和田 六三、八	菅野 一二六、九	高田 一五六、六

明治三十六年七月八日九日大和ノ降水分布



南日裏	洞川	寺垣内	河合
七三、九	八一、三	一二〇、八	九五、〇
追	五條	下瀬	上野
七二、四	九九、〇	一〇二、八	九八、一
三本松	南ノ庄	月ヶ瀬	鷺家口
一二二、二	一六一、五	一一〇、五	八六、六
八木	王寺	丹波市	郡山
一四六、一	九九、〇	九八、〇	一〇四、三
			奈良
			一八、四
			高野山
			九五、三



大正元年九月廿一日ヨリ廿四日ニ至ル暴風雨概況

紀元二五七二年  
西曆一九一二年

今中央氣象臺の報告により此颱風中心の經過進行、深度等を記すれば左の如し

一經過 九月十九日の朝亞比島の北西方洋上に颱風出顯し北西方に進行中なりしが全日午後呂宋の東方海上に顯はれ今夜宮古島の南西方海上にて方向を北東に轉し二十日の朝宮古島の南方洋上に來り二十一日の朝に至り沖繩島の南方約百二十哩の洋上に來り二十二日午前六時には奄美大島の東方に迫り午後二時には屋久島の東方に來り全夜十時高知縣足摺岬附近に殺到し京阪以西に非常なる暴風雨を醸すに至れり此颱風は更に進行して四國東部内海東部を横きり京阪地方と姫路岡山の間より舞鶴附近に向ふて中國を横斷し二十三日午前六時には石川縣及福井縣の海岸に沿ふて進み能登半島を襲ひ關東及東北地方に暴風雨を起すに至れり而して颱風の中心は日本海岸に沿ふて進み午後二時奥羽地方を横きり北海道を通過し「オホツク」海に去れり

二進行 今回の颱風は亞比島の北西洋上より北西に進行し二十日の夕刻に宮古島の南西方海上にて北東に轉向したるものにして轉向點は東經百二十六度半、北緯二十一度半許に在り而して轉向前後の進路は極めて規則正しく直線に近し又進行速度は轉向以前は之れを確知し難しと雖も轉向後琉球列島附近までは一時十五杆にして夫れよりも京阪附近に至るまでは一時間四十八杆となり更に進んで本邦北部に到れる頃は一時間百杆となるに至れり乃ち今回の颱風も轉向點附近は其進行極めて遅々たるを免れざり



しが北上するに従つて著しく急速となれるを知るべし

三深度 颶風の洋上にあるや其深さ大なるもの多しと雖も陸に至るに及んでは急速に埋積して深度甚だしく減するを常とす而して今回の颶風の如く陸に於て七十耗附近の深度を持續せしものは實に稀有に属せり故に此點より察するも此颶風が洋上にありし時は頗る深厚なりしを想像するに難しとせず然れども不完全なる材料により之れを打算するは誤謬に陥り易きが故に暫く之れを避け、心は陸上に至りたる時の深度を見るに實に七十耗以下に在りしものゝ如し

四風速 二十二日の朝此颶風の琉球北部に接近するや九州及び四國南部に於ては北東の風強く沿海の地に於ては強風以上に達したる所少からず全日午後に至りては四國、中國、九州一帯に風勢増進し殊に四國南部の岬角に於ては風力颶風に達するに至れり而して二十二日の夜に於ては風域擴大して關東方面に及び二十三日の早朝に至りては京阪以西は風勢大に衰へたりと雖も關東方面には反つて猛烈となり大雨沛然として之れに勢を添へ狂風怒號し樹を抜き屋を倒すに至れり全日午後に至りて風域東北地方及び北海道に移り本邦北部一帯に暴風雨と化せり風速は割合に甚大ならずと雖も多度津に於ては一秒間四十二米を測れり是れ全地に於ては未だ曾て有らざる強風なり又津に於ては三十九米に達せり而して加茂(城山)に於ては一秒間五十米を測れりと雖もこれもと山上の觀測なるを以て他とは直に比較し難かるへし

#### 五雨量

今回の颶風は風雨を起し風勢猛烈なること前述の如しと雖も雨量は之れに伴はず勿論地方によりては大雨沛然として降り恰も盆を覆すが如くなりし所ありしと雖も元これ小局部に限り全体より見れば降雨は左まで劇甚ならざるが如し而して降雨の最も強かりしは二十二日より二十三日の早朝にして乃ち二十三日午前六時に至る二十四時間の総量は四國東部及紀州半島に最も多大にして九州及四國南部之れに亞く又房総半島の南端も多大にして之れと伯仲の間にあり乃ち最も多大なるは徳島の三百五十二耗にして布良の二百四十耗高知の二百二十九耗大分の二百一耗、多度津の百八十九耗、佐多岬の百七十八耗、松山の百七十三耗、舞鶴の百六十六耗、堺の百六十一耗、足尾の百四十三耗、岡山の百二十六耗、宮崎の百十四耗、足摺の百十耗、壽都の百〇一耗、飯田の百耗また少量ならずとせず

六波浪 颶風の洋上に進行するや長浪の之か先驅を爲すを常とす今回も九月十九日の夜此颶風の未だ呂宋の東方遙かなる洋上にあるや長浪支那東海に浸入し又遙か遠き本邦太平洋岸に達せり當時支那温州海岸の沖合を航行中なりし加奈多丸よりの無線電信によれば北風吹き風力僅かに疾風に達し好晴なれども長浪稍々高きを報し又八重山群島に於ては海鳴喧しく又紀州熊野沖を航行中の地洋丸も風浪を報し日向灘より土佐洋に亘りて海鳴聞ゆ而して全二十二日の午後颶風の九州及び四國に殺到するや本邦近海風浪甚だしく支那東海に在りし信濃丸銚子港の東方洋上に在りし春洋丸は何れも怒濤の甚だ大なるを報せり海岸に於ては高浪起りて恰も津浪の如くなりし所も少からず新聞紙の報する所に依るも伊勢灣に於て

風浪高く灣内に於て演習中なりし第一艦隊の諸艦艇中坐礁擱坐せしもの四隻に及び又熱田築港にても怒濤の爲め堤防敷所欬潰し浸水家屋及び船舶の沈没したるもの少からず鎌倉江の島海岸にては激浪岸を嘯み被害少からざりき

七被害 今回の颱風は琉球及び九州を掠め四國、本州及び北海道を通過したるを以て全國に亘りて著るしき災害を醸し電信にては京都、神戸、彦根、津、岐阜、大阪以西は二十三日の午前零時五分より不通となり東北地方及び北海道は二十三日午前八時頃より不通となり又電話線の故障も尠からざりき汽車の故障亦多く運轉の中止延着等は枚舉に暇あらず水戸線二十三日午前十一時羽黒福原間にて客車三輛顛覆二輛脱線せり中央線には二十三日午前八時八ッ澤附近にて貨物列車の顛覆せしものあり北陸線にては二十三日の午前十時伏木附近を進行中の列車顛覆せり其他家屋、建物の潰倒人畜の死傷等夥しく所により甚大なる被害ありしと云ふ

今此颱風進行中各所に於て觀測したる最低氣壓最大風速度及雨量(主として暴風雨中の量を記せり)を表記すれば左の如し

地名	氣壓			最大速度	方向	風		雨量
	最低	全上	起時			全上	起時	
石垣島	七五、〇	廿一日午前四時、五時	一四、八	北北西	廿一日午後四時	一、四		

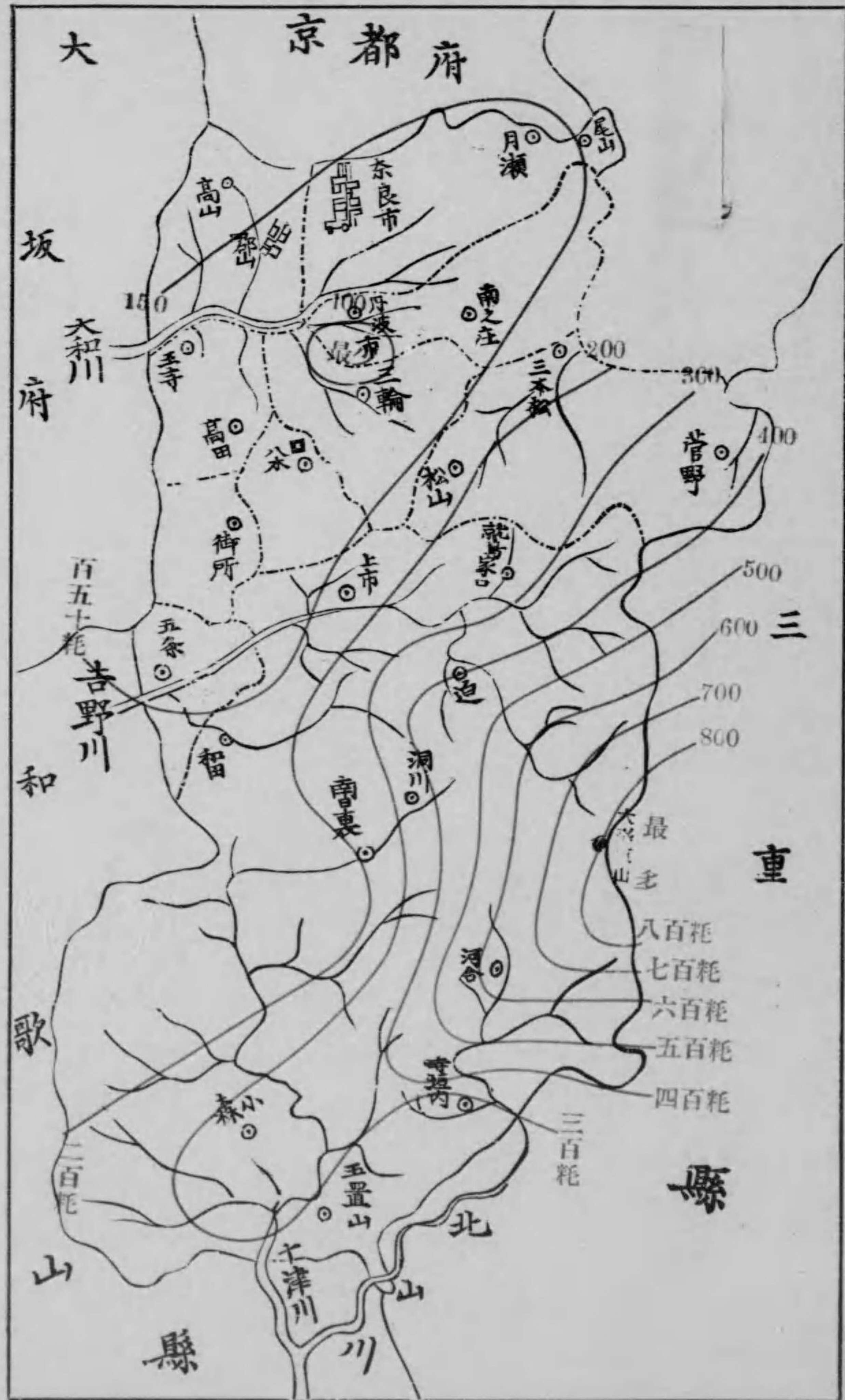
那覇	七四、五	廿一日夜半	三、九	北	廿一日午後五時三十分	二六、六	
名瀬	七三、四	廿二日午前七時二十分	三、一	北	廿二日午前十時二十分	二二、三	
佐多岬	七六、四	廿二日午後五時、六時	二、九	北西	廿二日午後六時	一四、〇	
鹿兒島	七五、六	廿二日午後六時	二、八	北北西	廿二日午後六時	一三、八	
宮嶋	七三、三	廿二日午後六時	二、〇	北	廿二日午後四時	二六、六	
長崎	七四、一	廿二日午後七時、八時	二、七	北北東	廿二日午後九時三十分	四、一	
福岡	七四、二	廿二日午後八時三十分	二、一	北北西	廿三日午前一時二十分	一四、二	
熊本	七四、一	廿二日午後十時二十分	一、八	北北西	廿二日午後十一時三十分	四、五	
足摺	七三、一	廿二日午後十一時	四、一	北東	廿二日午後十時	一八、〇	
下關	七四、三	廿二日夜半	二、七	北西	廿三日午後四時	五、〇	
松山	七四、〇	廿三日午前零時三十分	一、六	北	廿三日午前一時三十分	一七、〇	
新居濱	七二、六	廿三日午前零時三十分	二、一	東北東	廿二日午後六時二十分	一	
大分	七六、一	廿三日午前零時四十分	一、七	北北東	廿二日午前八時二十分	二九、八	
高知	七三、二	廿三日午前一時	二、一	北西	廿三日午前一時三十分	三九、四	

四阪島	七九、七	廿三日午前一時二十分	五〇、四	北北西	廿三日午前二時	一
廣島	七五、九	廿三日午前一時四十分	二四、二	北北東	廿二日午後十二時四十分	九六、九
多度津	七八、五	廿三日午前一時五十分	四三、一	北北西	廿三日午前二時五十分	三三、八
日の岬	七八、一	廿三日午前二時	一	北北西	廿三日午前二時五十分	九三、四
徳島	七七、四	廿三日午前二時三十分	三三、八	北西	廿三日午前三時	五七、八
岡山	七八、一	廿三日午前三時	二〇、七	北西	廿三日午前四時三十分	一四六、七
堺	七八、〇	廿三日午前三時	二〇、二	東	廿三日午前一時	一三九、六
和歌山	七一、三	廿三日午前三時十分	二一、一	西	廿三日午前四時三十分	一五五、〇
大阪	七四、九	廿三日午前三時三十分	三七、〇	西南西	廿三日午前五時五十分	一四七、四
八木	七四、〇	廿三日午前三時四十分	三六、七	南南西	廿三日午前四時五十分	一四四、八
神戸	七七、四	廿三日午前三時五十分	二六、七	北東	廿三日午前二時五十分	一五九、七
京都	七七、〇	廿三日午前四時十五分	一九、四	北東	廿三日午前四時	二八、一
舞鶴	七三、三	廿三日午前四時	三三、七	西	廿三日午前七時二十分	一六八、五
宮津	七四、二	廿三日午前四時	二二、五	北西	廿三日午前七時二十分	二二四、八

津	七三、七	廿三日午前四時三十分	三九、二	南東	廿三日午前四時	一七〇、二
名古屋	七八、六	廿三日午前四時五十分	四〇、三	南南東	廿三日午前四時四十分	一〇三、九
敦賀	七八、〇	廿三日午前五時	三三、六	北	廿三日午前九時	二三、五
彦根	七〇、九	廿三日午前五時	三四、三	南南東	廿三日午前五時	一〇〇、一
岐阜	七七、五	廿三日午前五時十五分	三五、七	南東	廿三日午前五時十五分	三七、三
福井	七〇、九	廿三日午前五時三十分	一九、七	西	廿三日午前九時	一〇三、四
高山	七八、四	廿三日午前五時五十分	二七、六	南	廿三日午前六時三十分	一〇七、七
金澤	七三、七	廿三日午前六時十分	三七、五	西	廿三日午前九時十分	八三、〇
飯田	七三、六	廿三日午前六時	二〇、〇	南	廿三日午前七時	一七、八
濱松	七四、三	廿三日午前六時	一九、八	南東	廿三日午前三時	一五三、一
沼津	七三、三	廿三日午前六時、七時	二五、二	南西	廿三日午前八時	九九、五
八丈島	七九、〇	廿三日午前六時	三四、四	南西	廿三日午前九時	一
長津呂	七三、八	廿三日午前七時	三三、九	南西	廿三日午前十時	一
布良	七三、一	廿三日午前七時	五八、五	南	廿三日午前八時	一

加茂	東京	銚子	新潟	横濱	前橋	熊谷	足尾	相川	甲府	長野	伏見	横須賀	松本
七五、〇	七四、七	七三、六	七三、四	七二、一	七五、〇	七六、四	七六、四	七六、九	七六、八	七三、〇	七五、二	七五、六	七三、一
廿三日午前 十時	廿三日午前 十時	廿三日午前 九時三十分	廿三日午前 九時二十分	廿三日午前 九時	廿三日午前 八時二十分	廿三日午前 八時、九時	廿三日午前 八時	廿三日午前 八時	廿三日午前 八時	廿三日午前 七時三十分	廿三日午前 七時三十分	廿三日午前 七時	廿三日午前 七時
一九、七	二三、二	三五、六	三三、八	二六、五	三三、九	二五、六	三〇、三	三九、四	二三、六	一三、〇	二三、九	二七、五	三〇、二
西	南南東	南南西	南南西	南南西	南南西	南南東	南南東	西北西	南	西	西	南南西	南南東
廿三日午後 一時三十分	廿三日午前 六時	廿三日午前 十時	廿三日午前 十時	廿三日午前 九時	廿三日午前 六時二十分	廿三日午前 六時	廿三日午前 七時	廿三日正 午	廿三日午前 五時	廿三日午前 十一時	廿三日午前 九時四十分	廿三日午前 十時	廿三日午前 七時
一、七	一〇、九	一	二六、七	一四、二	四〇、七	六三、一	一	三九、六	一八、五	四、七	四、四	九、〇	六、四

綱走	十勝	宗谷	札幌	壽都	宮古	函館	龍飛	青森	秋田	石巻	山形	水戸	宇都宮
七三、八	七四、一	七四、八	七五、三	七五、五	七二、八	七九、四	七八、三	七七、六	七八、五	七五、七	七二、二	七九、九	七七、五
廿三日午後 七時、八時	廿三日午後 七時	廿三日午後 七時	廿三日午後 四時	廿三日午後 三時	廿三日午後 三時	廿三日午後 三時三十分	廿三日午後 二時	廿三日午後 二時	廿三日午後 一時	廿三日正 午	廿三日午前 十二時二十分	廿三日午前 十一時	廿三日午前 十時十五分
一九、七	五、〇	四、〇	二四、七	四〇、二	四四、八	二五、二	三一、四	二六、四	三三、七	三六、七	二六、六	二六、九	二三、〇
北北西	北西	北東	北西	北北西	西南西	北北西	北西	西北西	西北西	西南西	西南西	南南西	南
廿三日夜 半	廿三日午後 四時	廿三日午後 六時	廿三日午後 十時	廿三日午後 七時三十分	廿三日午後 五時	廿三日午後 四時	廿三日午後 八時	廿三日午後 六時三十分	廿三日午後 三時	廿三日午後 四時	廿三日午前 十時	廿三日正 午	廿三日午前 八時四十分
一	一	一	八、〇	一	四、六	七、五	一	三、〇	六、八	一六、二	一	四、四	一



釧路	七三、六	廿三日午後七時	一九、〇	南南東	廿三日午後三時	一
根室	七三、九	廿三日午後九時二十分	二七、三	東南東	廿三日午後四時	三、二
紗那	七九、七	廿四日午前一時	一九、三	南南東	廿三日午後三時	一

(天氣圖參照)

但し徳島の雨量は廿一日、廿二日、廿三日の降雨総量なり又加茂の城山は廿三日午後二時最大風速度五十米五四に達せり

而して我大和地方は颶風の室戸岬より紀淡海峡を通過しつゝある頃に最も颶心に接近せる時にて即ち颶風の右面に當りて其颶心より距離は約十里乃至二十里にして最も風勢の猛烈なる部分に入りしを以て縣下の被害は實に多大に上り其被害高約參百萬圓に達せり此の如き大風は甚だ稀有のものにて明治二十一年八月三十日及二十九年八月三十日の兩暴風以上の猛勢なりしことは其被害に就て見るも明なり今八木に於ける觀測及び縣下の被害を擧示すれば左の如し

八木臨時觀測	氣壓 (海面)	風 (毎秒米)	雨量 (耗)
九月廿二日 午前二時	七五七、三	西	六、〇

廿三日

午前六時	午前九時	午後二時	午後六時	午後十時	夜半	午前一時	午前二時	午前三時	二十分	三十分	四十分	午前四時	五分
------	------	------	------	------	----	------	------	------	-----	-----	-----	------	----

最低

七五七、〇	七五六、三	七五三、二	七四八、三	七四〇、三	七三五、三	七三一、五	七二六、八	七一七、八	七二六、四	七二五、二	七一四、〇	七一五、三	
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--

靜穩	東	北	北	東	北東	東	南東	南東	南東	南東	南南東	南	南南西
----	---	---	---	---	----	---	----	----	----	----	-----	---	-----

〇、〇	一、〇	三、一	四、五	四、六	四、〇	九、八	八、〇	一三、八	一五、一	二〇、七	一九、三	二四、七	三六、七
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------

一三、九	一三、四	三七、九	一三、八	二〇、一	二一、五
------	------	------	------	------	------

午前十時	午前九時	午前八時	午前七時	午前六時	午前五時	四十分
七五〇、二	七四七、六	七四四、八	七四一、三	七三六、八	七三〇、四	七二七、八
西	西	南西	西	南西	西南西	南南西
九、三	一三、四	一四、一	二〇、一	二五、三	二三、五	三一、四
二、六						七、七

縣下各都市別被害高

郡市別	河川	道路	橋梁	溝池及用水路	建物	田	畑	其他損失	合計	歴死人
磯城	三六〇	四三二	二二五	三三	一一〇、〇六六	三三、四六一	三九、三六七	三九、二五四	五〇七、一四二	九
山邊	一	七	一	一	一七、九六〇	一一〇、五〇〇	九、六四四	二九、四五二	三三、六三〇	〇
生駒	一	一	三〇〇	一、三六〇	二、五七	二〇五、七二二	五、八四三	三、九六四	二二九、七三〇	一
添上	一	三	一	一	一三、五九	一八一、三三四	一五、〇七四	一八、七〇六	三三、五九六	五

郡市別	河川	道路	橋梁	溝池及用水路	建物	田	畑	其他損失	合計	歴死人
宇陀	一、三九五	七、八九六	三、一九二	六三三	八、〇五七	七二、四四〇	八、三四〇	三三、五一〇	一三五、四六三	〇
高市	一三〇	二八五	六〇	二五〇	一九、九三五	一四六、七九〇	五、四四四	四四、二七五	二二七、一五九	一四
北葛城	六〇〇	四〇	一	一	三五、一五〇	一七四、五四四	一〇、〇〇〇	三三、八〇〇	二五四、〇九四	一
南葛城	一、七八三	四三	一	一	二六、五二	三八、六六九	九、四二七	七、四四〇	八三、八九三	四
宇智	四六五	三五五	三、八五〇	三六〇	五、二〇〇	五八、五六〇	一〇、〇〇六	三〇、〇〇〇	一〇八、八二六	一
吉野	一、七四〇	一九、二九七	九、五七七	一	六五、六四一	四九、六四三	四六、〇四〇	六〇八、六〇七	七四〇、五三五	一五
奈良	一	一	一	一	九、九五〇	六一、四四〇	六、二五〇	八五、四〇〇	一六三、〇四〇	一
合計	六、四七三	二八、四五六	一七、二二四	二、六六六	四七四、五〇二	二四七六、九五三	一六五、四三九	八七四、四〇七	二九八六、〇九八	五一

此颯風の爲めに受けたる縣下の損害は貳百九拾八万六千〇九拾八圓と計上せられしが當時春日神社境内及び奈良公園に於ける大小樹木の吹倒され或は吹折られたる數は一万七千三百五十四本に及び實に未曾有の風害なりとす尙ほ詳細は左の如し

春日神社境内風害樹木

- 一杉 百十八本 内根起 九十八本 中折及末折 二十本
- 一松 八十八本 全 八十八本 全 六十八本

一雜木 百四十一本 全 七十八本 全 六十三本  
計 二百六十七本

此公賣金額貳万〇六百五拾六圓貳拾參錢五厘

奈良公園に屬する分

一風損木 一万七千〇八十七本

此賣價拾四万五千八百貳拾參圓余

雨量は約四十時間に熊野川筋は百七十八耗乃至六百十耗、吉野川筋は下淵の百四十耗乃至大臺ヶ原の、八百十四耗又名張川筋は南の庄の百三十耗乃至菅野の三百七十五耗ありて所に依りては頗る大降量ありて相當の出水せるも奈良平原にては降雨時間の長かりし割合には降量少くして即ち約四十時間に百耗乃至百五十八耗過ぎざれば大和川筋は概して水害を免れたり尙ほ各川筋別の降雨量を示さば左の如し

熊野川上流	吉野川	大和川	名張川上流
玉置山 二七一、〇	大臺ヶ原 八一四、〇	御所 一二五、八	松山 一五八、〇
小森 三三〇、八	和田 一七七、四	高田 一三二、二	菅野 三七五、五
南日裏 一七八、六	迫 四〇三、六	八木 一四四、四	三本松 一九三、〇

洞川 二五七、九	五條 一四九、五	三輪 一〇六、〇	南ノ庄 一三三、〇
寺垣内 二八五、三	上市 一七三、二	王寺 一二五、六	月ヶ瀬 一四三、五
河合 六〇九、七	下淵 一三九、七	丹波市 一〇一、五	内ノ牧 二〇一、五
	鷺家口 二六三、二	郡山 一二二、六	
平均 三二二、二	平均 三〇六、九	平均 一二五、七	平均 二〇〇、七

大正二年十月三日暴風雨

紀元二五七三年  
西曆一九一三年

九月二十九日馬利亞那群島中のグアム島附近に颱風發生し北西に徐行し十月一日小笠原列島と沖繩島の間に来たり同夜琉球大東島の東方洋上を経て北東に轉向し三日の朝には土佐室戸岬の沖に到着し途に紀州田邊附近より同半島に上陸し熊野より津、岐阜方面を経て中山道を通過し四日の朝勿來附近より太平洋に入り五日千島の南方海上に去る此颱風の進行方向及び速度は次表の如し

日	次	時	刻	中心の位置	方向	速度	杆時
				東經北緯			



九月二十九日	午前六時	一三七度七	一八度二	北西	一四、八
三十日	午前六時	一三六度	二一度	北西	一六、六
十月一日	午前六時	一三四度四	二四度	北北西	二一、三
二日	午前六時	一三三度二	二八度二	北	一一、一
三日	午前六時	一三三度六	三〇度四	北北東	四九、九
四日	午前六時	一四二度二	三七度七	北東	三七、九
五日	午前六時	一五〇度九	四一度九	北東	

此颱風は其經路附近に著しき風雨を起し潮岬にては三日午後四時氣壓七百三十耗八に降り大阪にては同日午後六時風速一秒に付三十五米六に達し其他風力烈風に及びたる所多く所により著しき風水の害あり大阪市にては家屋の潰倒又は破損せるもの頗る多く甚大なる損害を被むれりと云ふ今此颱風の經路附近の測候所に於て観測せる最低氣壓及び最大風速度を擧ぐれば左表の如し

地名	最低氣壓 <sub>海面</sub>	日次及時刻	最强風速 <sub>每秒</sub>	風向	日時及時刻
德島	七四九、三	三日 午後五時	一三、四	北西	三日 午後五時

和歌山	七四四、九	三日 午後三時	一六、七	北	三日 午後六時十分
潮岬	七三〇、八	三日 午後四時	三〇、〇	東	三日 午後三時三十分、三時
多度津	七五一、四	三日 午後五時	一六、一	北北西	三日 午後九時
神戸	七四四、五	三日 午後五時	二三、五	北	三日 午後六時
大阪	七四三、五	三日 午後五時三十分	三五、六	北北東	三日 午後六時十五分
京都	七四四、六	三日 午後六時	一一、四	北	三日 午後八時
八木	七四二、七	三日 午後五時	三〇、五	北	三日 午後五時
津	七三五、一	三日 午後七時	二五、九	東南東	三日 午後六時
岐阜	七四二、四	三日 午後七時	一三、二	東	三日 午後六時
名古屋	七四〇、一	三日 午後七時四十分	一七、三	南東	三日 午後八時二十分
濱松	七四五、五	三日 午後七時、七時三十分	一六、五	東南東	三日 午後七時三十分
長津呂	七四二、四	四日 午前二時	三九、七	西南西	三日 夜半
横濱	七四五、九	四日 午前三時十五分	一四、八	西北西	四日 午前十時
東京	七四五、九	四日 午前一時、二時	一三、二	北西	四日 午前十時

熊谷	七四六、〇	四日	午前二時	一九、七	西北西	四日	午前十一時
布良	七四七、七	四日	午前四時	三一、五	南	三日	午後九時
銚子	七四六、五	四日	午前三時	一七、六	南西	四日	午前三時
八丈島	七五一、四	四日	午前二時、四時	一九、四	南西	三日	午後十一時
飯田	七四五、一	三日	午後九時、十時	一四、九	北北東	四日	午前十時
松本	七四七、四	三日	午後十時	一六、一	北北東	三日	午後九時
長野	七四六、四	三日	午後十時	一三、一	南西	三日	午後十時
甲府	七四五、〇	三日	夜半	一七、二	北西	四日	午前九時
前橋	七四五、三	三日	夜半	一六、七	東南東	四日	午前〇時二十分
宇都宮	七四六、五	四日	午前三時三十分	一一、三	北北東	三日	午後十時
彦根	七四三、九	三日	午後七時四十分	二二、二	北	三日	午後六時
新潟	七四七、〇	三日	夜半	二六、一	北	四日	午前四時
水戸	七四六、四	四日	午前四時	一三、九	北東	三日	午後二時
宮古	七五〇、八	四日	午前四時三十分	一六、八	北	四日	午前三時

青森	七五三、六	四日	午前三時	一一、八	東北東	四日	午後六時
函館	七五五、二	四日	午前四時	一六、四	北北西	四日	午後三時
根室	七五四、六	四日	午前八時	二一、一	北北東	四日	正午

而して大和に於ては暴風中心の熊野を通過しつゝある當時なる三日午後五時に風雨最も烈しく北の颶風吹き其速度は三十毎秒米五を示し雨量は同日午前〇時三十分より午後十時迄の二十一時間半にて百〇六耗四を測りしが山間部は概して降量多く熊野川筋は百耗乃至二百二十耗又吉野川筋は百耗乃至三百三十耗ありて加ふるに風力猛烈なりしが爲めに同夜各河川共一時に出水して各被害を報ずるに至れり而して測候所近傍にある飛鳥川及び曾我川にも小破堤ありて頗る騒然たりしも急水の事とて翌朝は忽ち平穏となる今八木に於ける暴風臨時観測及び縣下の各河川流域別降水量を擧ぐれば左の如し

八木臨時観測	氣	壓	風	雨
十月三日	午前二時	七五八、五	北西	一、八
	午前六時	七五七、三	北	四、四
	午前十時	七五五、一	北	〇、七
				一五、八

午後二時	七四九、〇	北	五、六	一七、二
午後三時	七四六、六	北	七、六	
午後四時	七四四、六	北	一二、八	
午後五時	七四二、七	北	三〇、五	
午後六時	七四三、六	北北西	二一、九	三八、九
午後七時	七四六、八	北	一〇、九	
午後八時	七四八、五	西	九、七	
午後十時	七五一、四	西	九、二	一七、二

四八

河川流域別降水量

熊野川上流	玉置山 二二四、〇	大台ヶ原 三三三、〇	御所 一二五、八	松山 一四一、〇
	小森 一九八、七	和田 一四四、三	高田 九五、〇	菅野 二五三、八
	南日裏 一八七、五	追 一六九、九	八木 一〇六、四	三本松 一七二、五

洞川 一〇七、二	五條 一〇二、〇	三輪 一〇四、五	南ノ庄 一一〇、六
寺垣内 一八三、四	上市 一八三、三	王寺 七二、四	月ヶ瀬 一五六、四
河合 二〇二、九	鷺家口 一七二、二	丹波市 一〇三、九	
	下淵 一六七、〇	郡山 七六、〇	
		奈良 八九、〇	
		高山 七六、七	
平均 一八三、九		平均 九四、四	平均 一六六、九

此颱風は急速にて熊野を通過したるを以て暴風雨の時間は比較的短くして従て被害は比較的大ならざりしは甚だ幸なりし今縣下に於ける被害を擧ぐれば左の如し

被害種別	員數	價格
河川	1	一七、二〇七 <sub>円</sub>
道路	1	五五、四三〇
橋梁	1	一二、七六六
砂防設備地	1	四、四七四

四九

大正二年十月三日大和ノ降水分布



死亡計	其他諸損害	船舶	其他ノ土地	畑	田	建物	用水
一八六、三〇三	八、〇七〇	七五	四、三九五	三、七六三	七六、七七九	一、一八九	一五五
四	一	一	一	一	九六	二	二

大和の風水害と暴風雨の中心

風水害年月日	暴風雨中心の通過方面	示度
明治十八年七月一日風水害	熊野浦通過 志摩鳥羽	七二二 <sup>程</sup>
明治二十年十月七日水害	熊野浦通過	七四三
明治二十一年八月三十日風水害	紀伊水道通過 和歌山	七一八
明治二十二年八月十九日風水害	四國東部 高知	七三四
明治二十九年八月三十日風水害	大和縦貫 潮岬	七一五
明治三十二年十月六日水害	熊野浦通過 潮岬	七四〇
明治三十六年七月九日水害	畿内通過	七五〇
大正元年九月二十三日風水害	紀伊水道通過 和歌山	七一一
大正二年十月三日風水害	熊野浦通過 潮岬	七三一

今大和に於ける明治十八年以來の顯著なる風水害九回に就て調査するに暴風中心の紀伊水道に入りしもの二回熊野若くは熊野浦を通過せるもの四回。四國を通過せるもの。畿内を通過せるもの。大和を縦貫せるもの各一回にして先づ熊野を通過せるものと紀伊水道に襲來せるものとの二種として見るに紀伊水道に入るものは風力頗る強くして風害を受くること大に又熊野を通過するものは雨勢強くして水害を受くること大なり

大和に於ける流水は何れも河川の上流を形成するものなれば其降雨に際して出水の急なるは自然の趨勢なりとす然れども宇陀。十津。吉野。大和の各川共に其流域内に於ける山嶽の位置又は高低を異にするに樹木繁茂の差ありて自然に降水分布及び其出水の状態を左右すること少しとせず即ち吉野川又は十津川の如きは山深く所謂樹木鬱蒼たる豁谷の流水にして常に降水量多きも比較的被害少し又大和川の如きは水源淺く多數の流水が大和平原に集りて形成せるものなれば一朝大降雨あらんか忽ち破堤溢水等ありて頗る慘狀を呈するに至る而して出水には驟雨的のものと霖雨的のものとありて

驟雨的のものは勿論一時的の出水にして其衝に當りし箇所は甚だ慘狀を極むるも概して局部の被害に止りて假令は大和川は被害多きも吉野川及十津川は左程のことなきことあり即ち文化八年六月十五日の初瀬流れの如き又は明治二十二年八月十九日の十津川水災の如きは其適例なり

霖雨的の出水は實に恐るべき水患にして縣下の各川筋は勿論他府縣の河川まで同様なる廣區域のものにて即ち文化十二年六月の洪水。明治元年五月の洪水(以上陰曆)。明治十八年七月の洪水の如きは其著例なり

今大和に於ける明治十八年以來の水害に就て見れば七月上旬より十月上旬に至る間に在りて即ち夏秋兩季の大雨期節に出水を見るものなれば先づ大和にては六月より十月に至る五ヶ月間を出水期と見て差支なからん乎

大正三年十二月一日印刷  
大正三年十二月五日發行

### 奈良縣測候所

奈良縣磯城郡三輪町大字三輪第參百七拾壹番地

印刷者 檜 垣 嘉 藏

奈良縣磯城郡三輪町大字三輪五百四拾五番地ノ壹

印刷所 三輪文明社

(電話壹九番)



14.
6.
114

終

